

2022年2月

聖句随想・折々の言（ことば）

－読み飛ばさなくてよかった 出エジプト記18章－

牧師 森 言一郎

しゅうとはモーセに送られて、自分の国に帰って行った。

（出エジプト記 18章27節）

名 画や深く心に残るお芝居には、名脇役と呼ばれる人物がいるものです。聖書にも多くの脇役が登場します。ちょっと顔を出すだけの人も実に多い。きょうは、気が付いたらそこに居て、務めを果たし終わると、すーっと消えて行った「エトロ」という人物に焦点を当てて考えてみます。エトロが活躍するのは旧約聖書の中でも要の書である『出エジプト記』の真ん中あたりの18章です。わたし流の勝手な読み方からすると、エトロの登場は、のちのキリスト教会にも影響を与えるような、重要な転機となったのではないかと思うのです。

*

モーセには消すことが出来ない「過去」がありました。40年前、モーセはエジプトで殺人を犯し、逃亡せざるを得なくなったのです。逃亡者となり、エジプトから姿を消した彼は行き場を失います。荒れ野の放浪の果てにたどり着いたのが、エトロが祭司として生きていたミディアンという地でした。

*

裸同然のモーセには何の当てもありませんでしたが、たどり着いたミディアンの井戸端で、やがて妻となるツイポラと出会います。ツイポラの父エトロの、「なぜ井戸端で助けてくれたそのお方を、そのままにして来たのだ。呼びに行き、食事を差し上げなさい」というひと言が切っ掛けで、モーセは命拾いするのです。こうしてモーセは、ミディアン人として40歳から80歳までの40年もの間、暮らし続けることになるのです。

*

ある日、モーセがシナイ山で羊飼いの仕事をしていた時に、神さまからの不思議な召しを受けます。殺人を犯し、逃げ出した地エジプトに戻って、同胞を導き出すリーダーとなりなさい、という命令でした。モーセはエジプトに戻ることになりますが、もしもエトロがそれを認めなければ、モーセは新しい一歩を踏み出すことなど出来ませんでした。

*

出エジプト記 18 章でのエトロ。その登場の仕方は唐突にすら見えます。もちろんこれは、神さまのご計画です。遠路はるばるやって来たエトロは、先ず、モーセの積み重なった苦労話に心を傾けた様子です。ミディアンで共に暮らす中で、モーセはエトロに対して、ある程度の胸のうちを話すことが出来る間柄になっていたのだらうと思います。聖書にはその描写こそありません

が、モーセは近況をつぶさに報告していたはずで
す。そんなやり取りののちに、先ず、エトロは、
モーセと長老たちと共に神さまに感謝する礼拝を
捧げたのです。

*

それからエトロは、行き詰まりを覚えていた
モーセに的確な指示を出し始めるのです。
人が苦勞に苦勞を重ねながら何とか続けているこ
とに対して「ダメ出し」をすることは、ことのほ
かおつかしいものです。しかし、エトロがモーセ
にしたことは、モーセに対する「ダメ出し」でし
た。

「孤軍奮闘は終わりにせよ」「おまえさんの近くには、有能な人たちが居る。任せろべき事は任せろのだ」。実のところ、神さま以外にモーセに指示を出せるのはエトロしかいなかったのです。ミディアンで40年間世話になり、様々に教えを受けたという下地があるエトロからの言葉だからこそ、この場面で、エトロの教えをそのまま受け入れるこ

とが出来たのです。

＊

昨年の大晦日の土曜日、敬愛する「W たか」さんが93歳で天に帰られました。それだけではありません。思いがけず、召される方がいたので。W たかさんの葬儀後の礼拝堂の片付けをのんびりと始めていた1月5日（水）の朝、私にはお茶目で可愛らしいおばあちゃまに見えていたうち子さんが、92歳で天に召された、との報をご家族から受けたのです。

＊

お二人の葬儀に、わたしはただ一所懸命に仕えさせて頂きました。牧師に託された務めを果たそうと集中し力を注ぎ出しました。7年前の旭東教会の牧師就任式の際、前任地・稚内で取り組んだ利尻昆布バザーに重ねて、長く大きな「だし昆布」を手に掲げながら、こんな挨拶を口にしたことを思い出しました。「この地で、惜しみなく、

だし尽くして参ります」と。

＊

お 二人の葬儀と日曜日の礼拝を捧げ、新年の役員会を終えて一息ついたわたしは、少し前に礼拝で一緒に読んだ出エジプト記 18 章を読み直したいと思ったのです。エトロがモーセに伝え、モーセが受け入れ、イスラエルの民が始めたことは、今のわたしたちの教会の歩みに重なるところがあるのではないか。多分、そのように感じたのです。

＊

エ トロがモーセに助けの手を差し伸べた場面は、みんなの賜物を生かして助け合い、力を合わせ、分担し合うことをよりいっそう大切にしなさい、と言われていたように感じました。わたしたちが信仰をもって生きるということは、礼拝で示されるみ言葉に本気で聴き、本気で倣うことが、いつもその歩みの土台だと信じて

いるからです。

*

キ リストの体である教会というものは、神さま、イエスさまとは違って、ある意味、常に限界があり、永遠ではないことは事実です。しかし、そうではあるけれども、わたしたちは聖書の教えに素朴に倣い、少しずつ形を整えながら、柔らかな姿勢で、時代に見合ったあり方を祈り求める努力を続けていくのです。

*

エ トロは、聖書の中で大物と呼ばれるような人物ではありませんでした。名前すら忘れられることの多い存在かも知れない。でも、そんなエトロを通じて示されていることがあります。神さまは脇役を求めておられるのです。みんながモーセになる必要などありません。今回の学びは、わたしたちのこれからの旅路のために与えられた聖霊の導きによるものです。

*

モーセに見送られてミディアンに向けて一人歩き出した老エトロの背中、小さかったかも知れません。でも、幸せに見えたはずで、す。足取りは軽やかで確かでした。彼はこの時、いつ天に召されてもよいと思う程におだやかで、喜びに満ちて家路に着きます。エトロは、彼に託されていた使命を果たし終えたのです。end